

# 新たな耕畜連携システムの構築を目指して

## ～耕種と畜産、2人3脚で目指す所得確保と省力化、高品質飼料生産～

### 1 活動のねらい

千葉地域における耕畜が連携した WCS 用稲生産は、平成 25 年から八千代市で行われていますが、畜産農家の WCS 用稲の需要量に対して、生産量が不足しています。そこで、耕種農家へ WCS 用稲の生産拡大を推進するとともに、コントラクター、畜産農家と協力することで、WCS 用稲を生産・利用する新たな耕畜連携システムの構築を目指しました。

### 2 課題の背景

管内の WCS 用稲は、八千代市を中心に生産されていましたが、平成 30 年度より始まった米政策で、WCS 用稲の収益が食用米や飼料米に比べ減少したこと等から、平成 30 年の約 22ha をピークに生産面積は減少傾向となっていました。一方、畜産農家では、飼料価格の高止まりや農家の経営規模拡大により、地域内で得られる安価な自給飼料として WCS 用稲の需要が増加しており、需要量を確保するために、新規の WCS 用稲栽培者の掘り起こしが必要でした。また、耕種農家では、水田規模の拡大や作業者の高齢化等から、稲の収穫・乾燥調製の労力が不足している経営体がみられていました。

そこで、作業分散に課題のある耕種農家とコントラクターが連携して WCS 用稲を生産する新たな耕畜連携システムを構築することで、耕種農家の労力を軽減し、畜産農家の飼料需要を確保することに取り組みました。

### 3 普及活動の経過・成果

#### (1) 活動の内容

##### ア 高収量・高品質な飼料生産のための栽培技術指導

コントラクターに刈取り・調製を委託するには、最低でも WCS 用稲の販売代金で委託費を賄う必要があり、収量の確保が重要です。そこで、作物担当と畜産担当が連携し、品種選定や増収技術の指導、試験ほの生育状況に基づいた栽培管理指導を行いました。

##### イ 栽培結果から経営収支モデルの作成

試験ほの調査結果から、食用米・飼料用米・WCS 用稲の経営収支モデルを作成しました。このモデルを現地検討会等で紹介し、WCS 用稲生産の特徴や有利性を周知することで、新規栽培農家の掘り起こしを行いました。



写真1 千葉市で行った現地検討会  
(令和元年度)

## ウ 耕種農家・畜産農家・コントラクターの連携の強化

活動の中で、耕種農家の“高品質飼料生産”、畜産農家・コントラクターの“刈取り・調製後のほ場条件”等に対する意識の差が、耕畜連携システムを構築する上での課題であることがわかりました。そこで、3者が意見交換できる研修会や現地検討会を積極的に開催しました。刈取り直前のほ場で、3者が生育状況を確認しながら意見交換をする場を設け、高品質・高収量飼料生産に対する意識の統一を図りました。

## エ 栽培研修会の開催

耕種農家の技術向上を目指し、管内3市のWCS用稲生産者を対象に、新型コロナウイルス感染拡大防止のため5サテライト会場を繋いだ研修会を開催しました。各市での取組の他、海匝・山武地域の優良事例の栽培技術を学び意見交換したことで、自己の栽培方法を見直す機会となり、耕種農家の意欲向上に繋がりました。



写真2 栽培研修会のサテライト会場  
(八千代市、令和2年度)

## (2) 活動の成果

作物担当と畜産担当が連携し、耕種農家に対する栽培技術指導や、耕種農家・コントラクター・畜産農家との連携を強化した結果、千葉市・市原市・八千代市で3つの新たな耕畜連携システムを構築することができました。また、4,000kg/10a以上のWCS用稲の収量を得ることができました。

経営収支モデルの作成と情報提供、現地検討会での周知により、水稻作業の分散を図る手段としてWCS用稲に取り組む栽培者が増え、作付面積の拡大に繋がりました。

## 4 将来の方向と課題

WCS用稲生産の取組継続及び生産拡大には、“最低でもWCS用稲の販売代金でコントラクターに支払う刈取り・調製費用を賄う”必要があります。千葉地域の耕畜連携システムでは、およそ3,500kg/10a以上の収量を維持し続けなければならないこととなります。目標収量の安定的な確保に向け、作物担当と畜産担当の連携した栽培技術指導が必要です。また、畜産農家の需要量に應えるため、新規のWCS用稲栽培者の掘り起こしが課題となっています。

5 担当者 ◎千葉・習志野グループ 君塚 時江、市原グループ 山下 瀬里奈

6 協力機関 千葉市、市原市、八千代市